
Nの咆哮

オバチャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Nの咆哮

【Nコード】

N2884Q

【作者名】

オバチャン

【あらすじ】

日本に攻撃をしかける中国軍に日本は敗退を繰り返し、中国軍の上陸を目前に控えていた。日本は終に最終兵器を投入するがそれを操るのは民間人であった。それを操る仲村たちはある日、空から降りた爆弾により火に包まれる。全員が死んだ、そう思った瞬間、目の前に現れたのはゼロ戦だった。

「仲村、少し調子が悪いみたいなんだけど」

「主砲をレーザーシステムにリンクさせてみてください。ラグはなくなります」

仲村と呼ばれた青年は隣に座る年上の男に指示を出す。コンピュータのディスプレイの光が二人の顔を照らし出している。薄暗い部屋に二人が閉じ籠っているのだ。

仲村のすぐ目の前にあるランプが赤色に点滅する。それと同時にピーという電子音もなった。仲村は通信機器のスイッチを入れる。

「すぐにイージスシステムに戻せ！」

高性能の通信機器も音が割れる。それほどの大声を出す副艦長にため息をつく。

「レーザーの方が射程圏もあります。それに弾数に限りがあるんですから、命中率の高いこちらのほうが……」

「うるさい！ イージスのほうが優秀だ。そんな胡散臭いシステムなんぞに命をかけられるか！」

「……了解。戻します」

もう何を言っても無駄である。そう判断し指示に従う。

「大変だな」

「先輩ももう少し勉強してくださいればレーザーの有用性がわかりますよ」

「そんなこと言われてもなあ……。N計画ってそのためにあったんじゃないのか。それがこんな事になるってだれも思わないよ」

仲村に先輩と呼ばれた男、原田は深く息をつく。本当は泣き叫び、駄々をこねたい。だが今この状況を乗り切るために心の中の自分までも偽って虚勢を張っている。自分より年下の仲村も多分そうなのだろう。なら自分は仲村よりも強気でいなければならぬ。弱音は吐いていられない、と覚悟しているのだ。

確かに誰もがこうなるとは思わなかった。それは三ヶ月前の事件をきっかけに急に世界が動き出したのが原因であった。

経済も若干の衰退の傾向にあり、また外交でも弱腰の日本は世界のなかでもいじめの標的になっていた。唯一の技術力も政府の政策により衰退、隣の韓国に追い抜かれてしまったのだ。第二次世界大戦の傷を世界が背負ったまま、日本は何も発言できなかった。すると世界は日本からの脱却を図る。誰も得などしない日本にいつまでも固執するはずがなかった。だが日本の技術力を取り込み、自分達の更なる発展へと導くために中国は日本に宣戦布告をしたのだ。アメリカは当然のごとく日本から撤退、日本は孤立してしまい、さらに専守防衛という信念が邪魔をした結果、各戦闘で敗退を繰り返し、中国軍の上陸を目前にしていた。兵も不足していた日本はついに最終兵器を投入する。しかしそれを使う人間は兵ではなく民間人であった。それは国内の反発を招くが彼らも、そうしなければならぬ現状に大きなことは言えないでいた。

N計画。New century計画の略称であるそれは日本を再びもとの土俵に戻そうとする計画であった。日本はそのため中国軍を払いのける必要があり、レーザーシステムを開発した。それは新造されたイージス艦に搭載され、半ば実験的要素を含めた実戦に投入された。そのイージス艦名は あかつき。レーザーシステムは対空、対艦、対潜に対応でき射程圏内までなら地上への攻撃も可能である。これは新兵器である レッドレーザー のためのシステムであるが他の武装にも対応できるため、仲村はレーザーシステムを推進しているのだ。450キロの探知を可能にしており、半径10キロ以内に入った標的を攻撃することが可能である。従来のイージスシステムはアンテナを要していたため、アンテナ型の武器であるレッドレーザーにとって邪魔な存在であった。そのため開発を進めた結果、レッドレーザーに攻撃とイージスシステムの役割をさせることになる。システムの軽量化を図るため、というのも仲村の推進の理由でもある。だが副艦長の言っていることもわからなくはな

った。確かに攻撃可能圏半径10キロというのは不安要素がある。他の艦に比べこれは決定的に劣るところだった。

日本がこれを実践投入したのがちょうど三ヶ月前であつた。もちろんこの艦に乗っているのはほんの少しの訓練を受けた民間人であつたが、そのことが世界を再び日本いじめの標的にし、さらには専守防衛を無視し先制攻撃を仕掛けたことが後に 日本が墮ちた日と呼ばれる事件になつたのだ。だがそのときはレッドレーザーは使われなかつた。仲村たちが落胆する理由はこの後の戦闘に理由があつた。

三ヶ月前 あかつき

「総員戦闘配備。これから中国艦隊を一気に潰す。イージスシステム作動させる」

「艦長、レーザーシステムを使いましょう」

仲村はそういいながら必死にコンピューターと対峙している。

「砲雷長、ハーブーンの準備はしておけ」

仲村の言葉を見殺して艦長は砲雷長である風間に命令をする。この艦は従来のは造りが違いすべての火器を管制する砲雷室を設けている。砲雷長を砲雷室に置かない理由は単なる原田のワガママなのだが。

「意地でも仲村には働かせないんだな」

「自分にとつては暇なほうがありがたいですけどね」

「なら代われよ。人を殺すことの重みがどれほどのものか……」

《艦内全てのモニターに全方向の映像を映します》

原田が愚痴をこぼそうとした刹那に艦内放送が響き渡る。原田は舌打ちをし、モニターをつけた。小さい画面が四分割され、艦の周りの映像を映し出していた。仲村は半ば落胆気味にその映像を黙視していた。この艦の長である竹内が勝手に決めた警戒時間は、彼の命令があるまでは解除されないのだ。軍の規律にこれ以上従うことを避け、独自のルールを展開するこの艦の搭乗員は、やはり自分たちと自衛隊は違うのだと言いたいのである。だがかえってそれが仲村を苦しめた。もう一週間もろくにこの部屋から出ていないのだ。トイレ以外は外出を許されず、食事も係りのものに運んでもらってきている。外にでたいのだ、と下手に欲望を刺激してしまい、余計に苦しいと実感する。

「仲村、あれ」

原田が前方を映し出している映像を指差した。仲村はそれを見る

と思わず立ち上がる。少し小さい山があった。だがそれは白煙を上げていた。イージス艦が煙を吐いているのだ。

仲村は急いでレーダーを確認する。レーダーはつきりと艦影を捉えていた。気付かなかった、外に気を引かれすぎて自分はレーダーの確認をしていなかった。それが敵だった場合、自分は仲間を殺す事になる。なんて愚かなのだろう。

「CIC。レーダーに艦影！ 索敵班は何をしているんだ！」

原田が怒声をあげる。そうすることで仲村をかばったのだ。今戦えるのは俺と仲村だけ、という切迫した事実が原田を行動に移させたのだ。

確かにCICにいる搭乗員もなぜ気付かなかったのか、と責めることができる。だがこの艦の搭乗員は皆口をそろえて逃げることもできるのだ。「いや、自分は軍人ではないのだから」と。

《あれは……同型艦の かみなり ……です。右舷に損害、戦闘を離脱してきたところで》とCICの搭乗員が告げる。

「逃げてきたのか……」原田が呟く。

《敵艦隊に謎の部隊がいるとのことですよ！》

「行けばわかる。全速力でいく。航海長、いいな？」と艦長の声。

「了解。機関最大、全速力で航行する！ わかったらやれ！」航海長が応答した。

何を偉そうに、と原田が呟くと艦内が慌しくなる。艦の後方を映し出している映像を見ながら仲村はもう戻れないと確信していた。

暫くすると再び艦内放送が響き渡る。

《敵艦捕捉。敵艦からミサイル発射、真っ直ぐこちらに向かってきます》

「ミサイルの種類は？」艦長が叫ぶ。

「ハーブーンです」

「なら問題ない。射程外だ」

仲村は息を止める。なぜ射程圏外からの攻撃なのか。こちらみないなド素人なら分からなくもない。だが彼らは軍人で戦いのプロな

のだ。なぜそのようなことをするのか。

「先輩……味方の艦はどうですか」

「ん？ まだ健在だ」

なぜ自分で確認しないのか、と眉間にしわをよせながら仲村を見る。その顔はまるで仲村をここにいないのだと感じさせた。隣にいるのに、自分の世界をつくり原田自身をも遮断する空気をまとっていた。お前は誰なのだと、問いたくなる。

「敵艦はまだレーザーシステムのこと知りませんよね」

「どうした？」

「ステルス艦……と考えたいですね」

「ステルスって発見が遅れるだけだろ。その可能性はないと思う」「だから潜水艦だと思います。ディーゼルエンジンで来ている場合、自分たちに発見はほぼ不可能でしょう。ソナーもまともに使えませんし……」

つまり仲村は別働隊がいるのだと言いたいのだ。射程圏外からの攻撃は注意をそちらに引き付けるためのものである。素人しか乗っていないこの艦に潜水艦の発見は不可能だと確信し、他の味方艦が発見に至らないところを考えて、新型の潜水艦なのだろうと疑っている。それにこの艦に搭載されているイージスシステムは日本が独自に開発したものではない。アメリカが開発したものでありそのまま組み込んでいる。敵に弱点を教えているもので、もし敵が自分たちに対抗するための何かを開発できたとすればもはやイージス艦は時代遅れの兵器である。ミニ・イージス艦でさえ敗戦を繰り返して、その数を減らしてきている。やはり日本は遅れた国なのであった。

「だつたらやってみるか？ どうせレーザーシステムが使えるのお前だけなんだから」

原田が仲村に語りかける。

簡単な操作が売りのシステムも完成に至ってはいない。実験的要素を含めた実践投入はそれが理由だった。レーザーシステムを動か

すための、独自のプログラミング言語を扱えなければならなかった。それはN計画にちなんでN言語と呼ばれている。この艦でそれが扱えるのは仲村だけで、原田は面倒だと放棄した。風間はもちろん、原田のワガママにより放棄せざるを得なかった。

実践を繰り返すことでシステムの再構築を目標とし、誰もが扱える兵器とすることがこの艦に、仲村に与えられた使命なのだ。だが何故か、副艦長は反対をする。もしかしたらもう国に従うのは勘弁だ、という反抗なのかもしれない。しかし仲村には関係の無いことだった。役目を終えて早く帰りたい、そう願うばかりだった。

「わかりました。全てのイージスシステムを終了します」

と仲村がキーボードを叩いた瞬間、全てのシステムが止まった。レーダーも暗くなり部屋は薄暗い照明のみに照らされている。ぞつとするぐらい艦が静かになった。一瞬の静寂、だがすぐに副艦長の怒声で室内は満たされた。

「すぐにイージスシステムに戻せ！」

「先輩、手伝ってください」

「分かった……」

「主砲とファランクスをレーザーシステムに切り替えてください」

「ミサイルは？」

「今はまだ、レーザーシステムは使えません」

確かにミサイルを発射する装置自体には適用できるのだが、ミサイル自体にはまだ使用はできず、つまり誤作動を起こしてしまう、痛いところであつた。併用すればいいのだが、以前にコンピュータ自体が耐えられなくなりシステムダウンを引き起こした。つまり対潜水艦の魚雷も同じく、使えない。全てをイージスシステムに頼った艦なのだ。

「できました。レーザーシステムを作動させます」

すると円球状のホログラムが仲村の目の前に現れる。その中心にあかつきがあつた。そしてその前方に味方を表す緑色の艦がいくつか展開されていた。その先にこちらと向かい合っている赤い艦

があつた。さらに驚く事に あかつき より下に存在する、つまり海中に潜む艦影が無数に表されたのだ。

仲村は目を見開いて荒い鼻息をたてる。原田は思わず立ち上がり言葉を捜すが何もいえないでいた。CICにも同じようにホログラムが展開されているのだが、この現実の際して言葉を失っていた。

「すぐに攻撃を…… レッドレーザーの準備を！」

艦長が叫ぶ。仲村は我に返りキーボードを叩き始める。 あかつき 付近にいる潜水艦が点滅をし始める。その数は七、敵艦隊の三分の一というところだった。

「もつとロックしろ！ できるだろ」

「いや、味方艦隊の救出が先です」

仲村は指示を出す風間を退けた。この状況では確かに味方艦付近にいる敵艦を沈めたほうが多くの味方を助けることができる。自分たちにも被害が及ぶ可能性は少ない。包囲網に完璧にはまってしまうと言っわけではないのだから。

「レッドレーザー撃ちます」

仲村は手元にあるトリガーを引いた。その瞬間、甲高く耳を貫く音が一面に響き渡った。一本の赤い線が海中に入る。激しい水しぶきを上げながら赤い線は動く。すると鈍い音がして艦が激しく揺れる。わずか五秒のことだったが、一瞬にしてレーザー内から点滅した潜水艦が消えたのだ。

「敵潜水艦は轟沈…… 味方艦は存続…… いや待って！ 敵潜水艦から魚雷が発射されました」

「いけるか、仲村」

「スーパーフランクスで行きます」

仲村はキーボードを叩き移動する物体をロックする。そしてファランクスを操作し、レッドレーザーとは違うトリガーを引いた。暫くして、レーザー内から魚雷らしき物体が消えた。

スーパーフランクスはファランクスに改良を加えた武器である。ほとんどの性能はファランクスとは変わらないが、違うところは単

発発射が可能であり、海中にも放つことができる、それらを可能にするためのレーザーシステムによる絶対射撃精度である。今回は単発で二発、海中に発射し、魚雷の破壊に成功したのだ。スーパーフランクスはミサイルの防御に対して、また戦闘機に対しても撃墜度は高いと言われている。赤外線レーザーとの連動、またレーザーシステムの醍醐味でもあるレーザー圏内をセル分割することにより命中率の底上げを図り、進路予測も容易にした。これがミサイルにも対応できるまで発達すれば、防御において最強を誇る盾となる。

《味方艦が今の攻撃から敵の位置を把握。攻撃に入ります》

仲村は手を止めモニターを見る。前方に展開している海上自衛隊の艦隊に あかつき が入り込む。仲村はレーザー内から潜水艦が一隻消失したのを確認した。すると一気に敵潜水艦が動き始めた。

《敵潜水艦浮上開始！ 対艦ミサイル、一気に……来ます》

潜水艦が あかつき と同じ高さまで上ると小さい点が全ての赤色から飛び出した。それは あかつき を含む全ての艦に対しての攻撃だった。

最強の兵器とも謳われるレッドレーザーには充電が三十秒必要で連続使用は不可能だった。つまりこの現状は、誰かが死ぬ、ということだ。

「フランクス、自動モードに切り代えて、レッドレーザーを手動に……」

隣でぶつぶつと呟く仲村に原田は若干の罪悪感を持った。自分はあえて楽な道をとった。そうすることでもしかしたら無能と言う烙印を押されて家に帰されるという淡い期待を抱いていたのだ。だが仲村は違う。与えられた役割をこなし、そうすることで自分と同じ目標を達成しようとしているのだ。自分に何かできること、今自分たちに必要なことはこれを考えることじゃないのか。文句ばかり言っただけで、逃げて、頑張る仲間を押付けて、それで苦しめて多少の罪悪感を持つ。それでも少ししたらそれに慣れて、また甘える。自分が本当に弱い人間なのだと原田は思い知った。

《あしがら 被弾、航行不能！ 続いて あたご に目標接近！》

仲村はキーボードを叩き、操作している。隣で何もできない無力に握りこぶしを作っている原田はその光景に啞然とした。仲村は全てのミサイルにロックオンしていたのだ。その中には射程圏を越えるものもあった。だが原田には聞けなかった、なぜそんな事をしていいのか。ただ黙ってみているしかなかったのだ。

甲高い音がする。モニターを見ると全てのミサイルが一瞬にして爆発していた。

「なぜだ……」

思わず原田は声に出してしまう。

「射程圏外でも威力はあります。ミサイルごときなら相当の距離は狙えます」

原田が感嘆し椅子に刷り込んだ途端、艦内放送が再び騒がしくなる。

《第二派、来ます》

仲村はもうどうすることもできない、と諦めた。後は各護衛艦が自分達の力で何とかするよう願うのみであった。

原田はその現状を見て直感した。このまま生き残れるのは自分たちだけだ、と。消耗戦を繰り返すだけの現宙域は自分達にとってただ生きる苦しみを伸ばしているだけに過ぎない。

「主砲が使えるはずだ……」

原田はそう言っ主砲を操作し始める。だが現在はレーザーシステムのために何をどうすればいいのかさっぱり分からなかった。

「キーボードにmain battery startと入力を。」

まだ主砲のソフトもできてませんから、ほぼ手動でやるしかありません！

「分かった！」

原田は指示されたとおりに入力する。

「どこをねらうんですか？」

「一番近くにいる奴にぶつける」

「わかりました。attack"one openとುತ್ತてください」

原田が言われたとおりにするとリーダー内の潜水艦が点滅し始める。原田は迷わずに主砲のトリガーを引いた。連射式の主砲はリーダーシステムにより全ての弾を目標にぶつけることになる。一分も立たずして、潜水艦は沈黙する。すると敵潜水艦隊は再び、潜水し始める。原田は手を止め、彼らをにらみ続けた。

《あたご より通信が入っています。艦長》

「砲雷室に繋げ。奴らのほうがいいだろう」

と艦長が漏らした瞬間に通信が入った。

《こちらあたご型護衛艦一番艦 あたご 艦長の滝崎一佐。貴艦の援護を感謝すると共に我が艦隊の戦列に加わることを提案する》

「こちら、N型護衛艦一番艦 あかつき の仲村です。あたご指揮下に入ります」

仲村は躊躇せずに返答をする。副艦長はそれが気に入らなかったらしく、激しい怒声を狭い部屋中に響かせた。仲村は顔の表情を変えずにCICとの直接の通信機器の電源を切った。

《貴艦は防衛にあたられよ。本艦隊は全力を持って隊列の再編、及び敵艦隊を排除する。救助は耐えられたし》

「了解、ですがこちらは現在、ミサイルは全て使用不可能でレーザー兵器も三十秒の間隔をあげなければなりません」

《……了解。貴艦は敵艦の殲滅に当たられよ。残りの艦隊で貴艦を援護する》

「了解、動きます」

仲村はあたご周辺に群がる潜水艦をロックする。レッドレーザーを使用し一気にあたごを守り抜いた。ファランクスが反応して弾を発射し始める。魚雷の排除及び、ミサイルの駆逐のために動いているのだ。

あたごを含めた護衛艦隊はついにその力を見せ付ける。ヘリコプターが姿を現しレーダー上から次々と潜水艦の姿が消え始める。あたごからミサイルが飛び始め先ほどのハーブーンを発射してきた敵艦に対して飛んでいく。それは一気に三発も発射されていた。

仲村は攻撃の手を止めふと考える。レッドレーザーをミサイルの護衛に使えないものかと。確かにこの距離からのレーザー攻撃では

艦に打撃を与えても軽微であらう。だがミサイルならコントロール・キル、あわよくばウォーヘッド・キルを狙える。いや、やはりこの現状は潜水艦の排除を目標とするべきなのであろうか。

「あかつき から まきなみ へ。俺たちの変わりに潜水艦の駆逐を！ 他の艦はその援護を。俺たちは あたご の攻撃を援護する」

原田が叫んだ。仲村は目を見開いて原田を見る。原田の根拠もない自信に満ち溢れた目が妙におかしく感じただけにやける。

「仲村、やれ」

「了解」

敵艦から迎撃ミサイルが多数発射される。仲村は時間を計って全ての迎撃ミサイルにロックをする。そしてトリガーを引いた。一基のミサイルを除いて迎撃ミサイルは爆発し、運が良かったのかそのミサイルも外れ海に沈んでいった。あとはか弱い火器に頼るしかなく敵艦は弾をばら撒いていた。レーダー上にあるミサイルが敵艦と衝突し消滅した。モニターを見ると敵艦は激しく炎上し、沈黙していた。

《 あたご より全艦へ。この宙域における唯一の艦を沈めた。残りの潜水艦の動きを知らせ》

《 まきなみ より報告。敵潜水艦は多少の混乱が目立ちます。指揮系統に混乱が見られます》

《 せとぎり より報告。敵潜水艦の撤退行動を確認。追撃しますか》

《 いや、もういい。残存部隊は救助活動を終えた後、補給のため下関基地に向かう》

この通信の後、仲村はもういい、とばかりに席を立った。そのまま部屋を出て、廊下を歩く。階段を下りて自分の部屋に向かった。

「仲村。お疲れ様」

誰かに呼ばれ仲村は振り返る。そこには風間が立っていた。速い動作に多少驚きながらもそういえば砲雷室は、CICの真下にあり、

はしごを使えばすぐにも移動ができたということを思い出す。

「どうした、疲れたのか」

「何日部屋に閉じ込めておく気ですか。さすがにやつれます」

「そうだよな。なあ、やっぱり砲雷室に俺を置くっていうのはダメなのか」

胸にあるモヤモヤが多分やつれというもののだろう。全てに対して苛立ちを覚える自分に嫌気が差していた。

「艦長には警戒時間を解くように言っておくからさ。そんな顔するなよ」

風間は別に仲村に媚びているわけでもなく、仲村を楽にさせたいと思つての発言だったのだ。だが今の仲村はそんなことを素直に受け入れられる状態ではなかった。仲村はさらにそんな自分が嫌になる。

「すみません、今はもう……」

そういつて仲村は風間の前から姿を消した。この空間には今風間一人だけ。どうしようもない現実に歯を食いしばって耐えるしかない。皆、同じ境遇のくせにそれぞれの悩みが違う、なぜ同じ立場にいなから仲村の気持ちが分からないのだろうか。

「風間…… ちょっといいか」

風間が振り返ると原田が立っていた。風間は黙って原田についていく。

二人は甲板に出ていた。風間は久しぶりの外の空気に全身からこもった熱が出て行くのを感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2884q/>

Nの咆哮

2011年1月26日13時05分発行